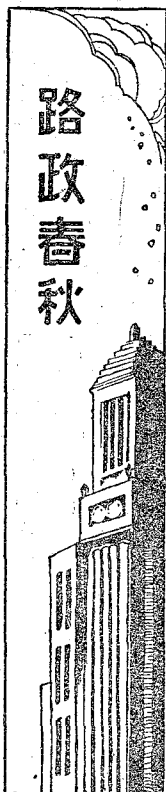


路政春秋



土木行政の明朝化

警保局長に轉ぜられた安藤前土木局長は一月十三日朝土木局總員に對し挨拶せられたるが其の中に、一昨年十一月土木局長に任ぜられ、爾來約一年三ヶ月間には實に明朗な愉快な歲月であつて今日何等不快な思ひ出なき自分であると述べられ、局員一同いたみいつたとの思ひがしたと想像せられた、辰馬技監の答辭の中に「安藤局長が土木局に就任せられたる當時は土木費に大削減が加へられ、實に暗き思ひを惹起せられたことと思はれしが御在職中此時局下に於て砂防事業の樹立、砂防課の設置、各地災害の善後處理は勿論十四年度豫算に吾等の

久しく待望し居る土木六大事業費を計上せられたることは實に以て局長の熱意と努力と指導との賜物であつて、感謝措く能はざる所である。曩に土木局長に就任當時の暗き心境は今日土木局を去らるゝに臨み明朗な心境に變化され、よくも土木局長たる時期を得たるものかなとの御感想を懐かるゝならん」と寔に克く局員の總意を述べられたるものかなである。土木行政の明朝化は今の時局下に於ての土木報國を實現せんが爲に最も大切なことである。

相互扶助の典型

福山市南町第二區ではこのほど戸主會開催、隣保扶助の典型五軒組制度を設けるこ

注意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

郵便貯金の今と昔

とになつたが、これは向ふ三軒兩隣の間で一切の世話をし合ひ人情味豊かな都會生活をしようといふので福山市内ではこれが、トップである、相互扶助隣保團結之れ自治の根幹である。之を缺如せしめて何處に自治の眞髓の存するにや善哉五軒組の結成。

趣味の談話として須藤忠平氏の談る所寔に興味津々たるものがある、東朝紙報じて曰く◇◇：郵便貯金は明治八年五月四日から始まつた。貯金をするにはまづ保證人を立て「貯金申込書」ではなく「貯金御預り願書」に「私儀節儉の餘金(中略)總テ御規則ニ遵可申候此段奉願候也」と書いて、

保證人と印鑑を揃へてうや／＼しく郵便役所へ差出すと、三四二種×一七四種の半紙で作つた「貯金預渡通帳」が下附された。

◇：當時の郵便役所は東京に十八ヶ所、横濱に一ヶ所計十九ヶ所であつたが、今は一萬八百五十五に殖えた。預金も微々たるもので、郵便貯金創設の恩人、前島密男爵の遺著郵便創業談に「預金者皆無に閉口し、役人連が自腹を切つて十錢貯金通帳を作つて與へたが効果がなかつた」

とある。
そこで坊さんや神主さんに頼んで貯金せよと説教して貰つたり貯金を勧誘した者には賞金を出したりした。

◇：明治十三年一月に「驛遞貯金」と變り同二十年四月現在の「郵便貯金」と改正され、同四十一年六月創業以來三十三年二月振で漸く一億にたどりついた。

現在は毎月一億圓以上も純増加があり六月末三十九億圓が十月末には四十三億を突破して、五十億へ物凄い勢で邁進す

る様は、世界驚異の躍進日本の眞姿を如實に現してゐる。

◇：創業當時の貯金利率は三分であつたが、西南戦争が起り、うなぎのぼりに金利が毎年上り、十四年には遂に七分二厘のレコードを作つた。それから漸落し日清戦争當時は四分二厘、日露の時は五分二厘四毛となり、大正四年の四分八厘は長く續き昭和五年四分二厘七年三分となり現行二分七厘六毛は第十八回目の改正である。

◇：野戦郵便貯金は日清戦争の二十八年四月から始まり、敵地へ金の撒布されるのを良く吸收した。今度の事變には特殊の美しい意匠を凝らした野戦郵便局専用の新通帳が登場し、戦線の鬚の勇士に可愛がられてゐる。

◇：又この頃はハイキングや旅に出た時必ず貯金をする人がある。或るハイカーは三等局十錢、二等局三十錢、一等局五十錢、と階級をつけて預け、又或る可憐な少女は綺麗に十錢宛ならべ思出の年月日と地名を

表はず、貯金のスタンプが美しくならんで居た。これ等は面白い誰にも出来る趣味的な貯金である。(栃木縣・須藤忠平)

國策に乗つて玉蜀黍の出世

愛媛縣上浮穴郡久萬山は「玉蜀黍を食ふ村」と稱せられるが、古來からこの玉蜀黍で名高く従つて氣候風土の關係からその耕作に恵まれこの地方山村に對する食糧供給上大きな役割を果して來つてゐる街の子供が玉蜀黍の飯を見ては卵御飯だと珍らしが、あるひは干してある玉蜀黍を眺め、「ばなながかけてある」と不思議がつたといふ笑へぬ實話もある。交通文化の恵みを受けて漸く玉蜀黍が飼養化し菓子の原料に代り「ハツダイ粉」として久萬名物を産むに至つたなど久萬郷一帶は漸次米食に移つてこの恵まれた玉蜀黍の高値來で農家經營に大きな利潤が齎され、増産國策に沿ふ村として活氣あふれる光景を呈してゐる。

あべこべにも程がある

日支事變以來ソ聯や英佛米などの歐米諸國の態度は我々日本人には合點が行かぬ、日本を援けて平和をもち來らすべきが條理であるのに蔣介石を援けて抗争を長びかしながらの抗議、はてな、恠むなけれあべこべは山と河との差別もものかはである、試みに數へて見やう。

(日本)

(西洋)

- 封筒は縦長
- 指を曲げて數へる
- 贈物は奇數を好む
- 燐寸は向ふへする
- 風呂の外で洗ふ
- 女の裾を前に取る
- お産のとき我慢強い
- 家庭主義を尊ぶ
- 針の穴は圓い
- 鰻をよく食べる
- 封筒は横長
- 握つた指を伸ばす
- 偶數を好む
- 手前に向けてする
- 風呂の内でする
- 裾を後にとる
- 泣きわめく
- 個人主義が普通
- 針の穴は四角
- 鰻は眞つ平御免

- 料理を一時に並べる
- 肴をつきさす
- 緑茶に甘みを加へない
- 姓が先名前が後
- 住所は番地が後
- 下駄を脱いで上る
- 日本畫は緑で描く
- 土間にねる
- 多神を拜む
- 一品づゝ出す
- 肴をはさむ
- 紅茶に砂糖を入れる
- 名が先姓が後
- 番地を先に書く
- 土足のまゝ上る
- 洋畫には緑がない
- 臺の上にねる
- 一神を奉ずる

あるかなきかの珍聞

奇譚(22)

○七百年前の名匠苦心の梵鐘 愛知縣知多郡旭村字北稻屋八社神社に古い梵鐘があるとは傳へられてゐたが、このほど名古屋市觀光課長淺野梨郷氏、郷土史研究家西尾和雄氏、三重縣囑託伊東富太郎氏らが同神社に參拜して釣鐘を視察し鎌倉期の代表的作品らしいのに驚きその銘文の拓本をとつて文部省囑託東京美術學校教授香取秀眞氏に送り鑑定を乞ふたとこゝろ、天下の名釣鐘で

あることが判明した。銘文には「美州不破郡清水寺奉鑄治鐘、寶治元丁未九月二十二日東大寺大工散位山川助清」とあり、いまから六百九十一年前清水寺の梵鐘として鑄造されたもので、山川助清は奈良東大寺の鐘大工として當時最高の權威者と認められ、散位の名稱を許されてゐた。文獻には巨匠散位助清ありと見えるがその作品はまだ日本に一個も發見されてゐないので全く稀有の珍品である、清水寺は九十九坊の一で應仁の亂に際して兵火に逢つたもので、寛正三年知多郡大草城主一色兵部少輔が三河を攻めたときその大勝を祝つて八社神社にこの梵鐘と太刀二振を寄進したと傳へられてゐる。この釣鐘は口徑二尺八分高さ三尺八寸に頂上に六寸の龍頭がついてゐる。從來東海地方で最も古い釣鐘は名古屋笠寺の鐘で建長二年鑄造であつたが、今回發見のものがつつとこれより古く同地方最古の折紙がつき、しかも作者まではつきりしそれが名工の作だけに學界に貴重な參考となる

譯である。

○先住民の人骨 このほど高雄市壽山から人骨が發掘された、發掘者は高雄中學の博物教諭土屋恭一氏で、動物採取のため生徒をつれて壽山の北方山麓龍泉寺裏山の洞窟に入つたところ、下肢骨を發見したのを最初に前後四回にわたる調査の結果、頭蓋の一部、上顎部、齒牙などを發掘、人骨は相當風化してはゐるがほとんど一體分捕つてゐた、なほ人骨のほか少しはなれたところ、石器および貝殻を發見、さらに鐵器まで出て來た。この發掘にまた先住民の跡が發見されたと大いに話題にのぼつてゐるが發掘されたものの時代の考證その他鑑定のため、土屋氏はこのほど右人骨を全部臺北帝大醫學部金關教授のもとに送付、目下同教授のもので研究されてゐるが、大體次のやうな諸點が明らかにされた。

まづこの人骨は熟年の男性の骨で、化石化してはゐないが風化は相當はなはだし、一見頑強な骨格の所有者で、上顎右側

の第一門齒の齒槽が萎縮してゐる状態から人工的缺齒を思はせ、ことに檜榔を嚙んでゐたらしいあとが注目され、蕃人でないかともみられてゐる、破損が甚しいため詳細は不明で、相當年代を経たものと斷定するにも否定的な鐵器、その他の材料もあるので年代の推定は困難だが、貝塚人骨とみてさしつかへないだらうとされてゐる。

○かるたの今昔：カルタは西班牙語 *Carta* 也と言海にある、昔天正の頃和蘭人が泉州に來て貿易を乞うた時はじめて我に傳へた、用ひ方を訊ねて見ると本邦古來よりの貝合せの様に「合せて取る」といふので早速日本人の間にもはやされた。

故にカルタの事を當時の年號を取り天正と言ひ今でもさう呼んで居る地方がある。更に慶長年間同じく和蘭人が長崎に來て又これを傳へた。

時に三池貞次といふ者が西洋風の繪襖様を日本風に描き換へ美しく着色して幕府に獻じた。將軍は非常に喜んで今後遊具と

して流行させよと命じたから盛々盛んにもてはやされた。

元和の頃ウンスンカルタが流行し、本紙連載の「宮本武藏」に堺の商人達が船中ウンスンカルタを弄ぶ場面があつたのを記憶して居る讀者もあるだらう。

これは一組四十八枚で同じ物が四枚宛ありこれを合せて取るのだが、どうして合せると云ふとその點は記録もなくカルタを持つて居ても取り方は知らぬと云ふ人ばかりで、正しい合せ方は今はわからない事になつて居る。

その後支那から渡つて來たカルタがある。支那では骨牌・弄牌・菓子・けう子・けう板・牙牌等と書いたが形は紙幣に似た物で全然賭事の道具に使つてゐた。日本でもこの時からカルタを賭今に使ふ不心者が現れたためいさゝかならずカルタの品位を落した。しかしそれは一部の事で實際の勢力は滔々として盛んになつて行つた。

正徳享保の頃に能狂言カルタと云ふ物が

流行した。これは殿上人が宴舞する圖や袴をつけたちよん鬚姿が日の丸扇を持つて力んだ圖や笠を被つた赤毛布の道中圖等で繪は頗る凝つた物だが文字は少しもなく従つて取方もわからない。

百人一首カルタをはじめ三十六歌仙カルタ・見立繪百人一首・肉筆カルタ（文政頃）等の所謂歌カルタや繪棋様と發句とを合せ發句カルタ等の高尚な物から、子供用に専ら行はれた二百枚組の花合せカルタや繪のある札を持ちその繪に合せる文字を箱の中から振出すかうの札等に至る迄、昔のカルタの種類も中々多い。

現代ではカルタ即ち大人用の小倉百人一首カルタ子供用の伊呂波カルタであるが、伊呂波カルタも忠臣藏カルタ・イソツブカルタ・化物カルタ・少女カルタ・鳥崎藤村いろはカルタ・野口雨情童謡カルタ等其他まだあらう。しかし何れも「犬も歩けば棒に當る」のあのカルタ以上に流行しないのは何故だらう。なほこの犬棒カルタの文句は

いより京まで元祿の俳人其角が作つたと云ふ説もあるが、眞偽の程は僕も知らない。

と福島・關根林吉氏の談。（東朝紙）

當季混詠

野狐禪

（勅題）水天を初日割しぬ千松島
 神宮の杜ほのく、と初からす
 春場所や月の街々觸れ太鼓
 松過の雪にとなりけり廓街
 猿曳の顔に似て猿の可笑しさよ
 兔放つ庭面や晴れぬ福壽草
 松過を机に倚りぬ物忘れ
 松過や一文獅子の破れ太鼓
 若人か叱咤の聲や寒稽古
 老骨の寒稽古可笑し力癩
 捨て舟に立つて雪の下りぬ寒
 寒鴉鳴き立つて雪の丘なだら
 廻廊に寄す瀬騷や初霞
 瀬田の橋長々と霞み初むるぞ
 福引て我が持ち寄りの品可笑し
 餅花の紅勝ちにして神灯
 風強き骨正月や酒の神灯
 獅子舞の太鼓うつゝや寝正月
 御降り紙を盛り外れたる筆の意氣
 書初や紙を外れたる筆の意氣